

平成16年度第1回学術講演会（講演抄録）

インターネット時代の情報倫理学

Information Ethics in the Age of the Internet

講師 水 谷 雅 彦

（京都大学大学院文学研究科助教授）

「情報倫理学」あるいは「コンピュータ・エシックス」というのは、近年注目を集めている「応用倫理学」(Applied Ethics)の最も新しい一部門である。一般に応用倫理学とは、今世紀後半のテクノロジーの爆発的な発達に既存の規範システムが対応しきれていないという問題意識に加えて、過去の大哲学者の理論を訓古注釈的に考察したり、さもなければ道徳的言語を形式的に分析したりすることに終始している倫理学の現状への反省から誕生したものであるともいえる。すでに生命倫理学や環境倫理学は一定の成果をあげているが、それらに続いて、コンピュータ技術をはじめとする電子テクノロジーの急激な発達が、たんなる「便利さ」の追究というのではすまされない深刻な倫理問題をわれわれにつきつけているという問題意識から近年議論されはじめたのが「情報倫理学」である。

「情報倫理学」は「コンピュータ・エシックス」と同じものとして扱われることもあるが、それは必ずしも正しくはない。「情報倫理学」の扱う領域が、必ずしもコンピュータと直接関係しないということもありえるからである。たとえば、最近、少年犯罪をめぐる議論された報道の自由をめぐる、メディア・エシックスの問題なども「情報倫理学」の扱うべき領域であろう。また、「インフォームド・コンセント」や「診療記録の開示」、あるいは「遺伝子情報」の管理などに関わる生命倫理の問題は、まさしく情報倫理の問題でもあるし、環境問題において議論の種になっているものの多くは、統計データなどの扱いをめぐる情報問題でもある。さらに官公庁や企業における「情報公開」、「内部告発」などのビジネス・エシックスの問題も、ある意味では情報の問題であるだろう。

しかしながらコンピュータという、ある意味ではこれまでの機械とは全く異質な存在が与えたインパクトがきわめて大きいことも確かである。まず重要なのは、現代社会におけるコンピュータの遍在化という現象と、まさにそれゆえに人々がコンピュータへの依存をさしあたっては意識しなくなりつつあるということである。第二に、人類が今後もほぼ全面的に依存するであろうコンピュータというものは、コンピュータはハードウェアの面でも、ソフトウェアの面でも「完全」ではありえず、なにがしかの「欠陥」を必ずもっているということが問題となる。また、欠陥が必然的であ

ると考えられているということは、それに対する責任というものが希薄になるということの意味する。さらに、「責任」の所在の不分明さということは、コンピュータというものには、さしあたって現在のところ本来の意味での専門家などいないのではないかという疑念をおこさせる。情報技術は、その誤用、乱用、悪用などが医療技術や爆発物取扱技術など同様の社会的影響をもつに至っているにもかかわらず、われわれはそれを専門家の責任に属する事柄としてコントロールするシステムをもってはいない！

情報倫理学が取り組むべき具体的な問題群は、「有害」情報、「不正」アクセス、デジタル・ディバイド、知的財産権、など多岐にわたるが、なかでも重要なのがプライバシーをめぐる問題である。プライバシーが、人間の基本的な権利であることは広く認められているであろうが、そのきちんとした概念的整理はまだできないといえるだろう。この概念的曖昧さのために、プライバシーは「公益性」の名のもとに制限されることがしばしばある。しかし、重要なのは、プライバシーの保護そのものにも一定の「公益性」があるということである。コンピュータやインターネットなどの情報技術の急速な発達、われわれのプライバシーをこれまでにない「危機」にさらす可能性がある。それに対して、プライバシーに関する冷静な学問的研究はまだ途についたばかりであり、現在最も必要とされているものである。

平成16年7月14日 於 附属図書館ホール

